

な二をかもをやれさんぬんよくををへ

二十七

ホホをかり小以けんあうれあ

ホれかろわどんあとおろの以けんでを

二十八

をやあでく以るうける事なく

ホれ以けんと此よなを此あをひかりて

二十九

ゆふとををええををく小ありぞく

と此よふなあホとをる小をささいより

三十

せへ以くを以小ホとわりてをく

歩ふまでハどんな事をを小ちくく小

三十一

あんを以あたる事で何れどを

何をかろわどんあ事ををみよとしてを

三十二

な小をさ以てをた此あみをかり

ホれまでハ音山かろわな小をかも

三十三

どんなさあすをうけさなれとを

ホれささハと此よあ事をゆハれてを

三十四

をやれさくすやさく小うけんで

以まゝでわひかゝるをちいとまゝさうん

四十五

とんなるをてちいと志ていた

をふまふひかちうふん小つん

四十六

とんなるを志を此まゝ小をる

おれかゝるをや此ををふうをかり

四十七

一子ゆゑをおれちかわん

せかちちう一れつひみおと志まて

四十八

どんなるをかりるや志れんで

ど此ふふなるをかりて志志んちつ此

四十九

心志小おわたりなく

心志志を志やか志んたを志るを

五十

どんなるをて志た此志志をかり

おれをなくううがう心有るをるを

五十一

志ふち志て以ふとんなみちやう

せかちちうををや此ふあ小ひみお志

五十二

かわれあまりてな小をゆうやう

亦此世か以言山小てをた小そ亦を

五十二

をや此た小わ亦亦をかりや

亦此たびわおんてをかてを志んちつ此

五十四

をや此心を志る志こ以か

亦れこ以かた志か小志ふち志こおるを

五十五

以つまで以てをよふ志つくめや

亦此みちハをやがた此みや一れつわ

五十六

どふそ志以かり志ふち志てくれ

歩ふまでをど此ふおみちをこんくと

五十七

とふりぬけてわきたるなれどを

亦れかう此みちハなんてをめつう志い

五十八

亦此みちとふりぬけさ事なる

それかうハをや此心か以こみでこ

五十九

とんな事でもをさめかけるで

亦れこ以かをちめかけさる事おるを

六十

とんおを此てををや小をされる

亦此みちをつけよふとして小志亦去る意

六十一

となむを此てをまゝ去るまゝに

さあかくれをふ亦れかく此みちをい

六十二

となむを此てを命ふなきわな

以まゝでわうち此を此小もいろく小

六十三

去んを以かけて去るるなれどを

命をかくハをやが一を命でるはと小

六十四

となむてをかや去くてやる

さあ去ふわな小此をなくをぶんくと

六十五

亦まかくくゆへをふせつうや

な小くてをゆハす小以てハわかると

六十六

亦小か以小をみなゆて去かせ

亦此をなくな小此可やく去るまゝに

六十七

をや此をたう去みなゆてをけ

をたう去を亦小此可やく去るまゝに

六十八

せか以此心み亦命くわを去

おれををなあくはれぶをとゆうはをな

六十九

めえめ正しくちでみなゆいかける

ど此よふあきてわがみくちいより

七十

ゆうりなくをせひあるま

おれかゝめえめおな小をゆいにて

七十一

をやか入おみゆうてかくるま

お此さきいどんおを此でもおんちつ小

七十二

むね此そふちをみおあてかくる

お此そふちどふあてをるとををうかお

七十二

とんないけんををるやあれんま

と此よふなまかありてをおんちなよ

七十四

な小かよろすわをや此いけんや

くちさきまなんぼおんちつゆうたとして

七十五

まくわけかないをや此さんねん

それゆい小をやかたいお入おんま

七十六

とんなまをををるやあれんで

と此よふなせつな以るかありてをな

七十七

やまに寄わな以をや此さぬんや

亦此をなくど亦此事とをゆへんてな

七十八

をや此たあ亦わみなわか亦や寄

志んかつ此をやのさんぬんでさなうを

七十九

亦此をさめかたされを志らま以

亦れををなま亦と志んかつ有るなうを

八十

どん亦事とをゆうてまかをる

ど此よふな事をゆうやう志れんでな

八十一

亦れそむいたうをく亦志りそく

亦れまては亦亦を志うとしてめうれて

八十二

そむくをかり此事寄有るかう

亦ふ此目ハと此よふ亦事を志うとしてを

八十三

亦亦をゆうてをそむま亦な亦うふ

亦此みちかくれくた此みをくほと亦

八十四

をや亦ひまうけ亦ん亦亦以そや

おれもハな小れもやとををうたふ

八十五

つとめなりをれをやくはくはく

をふ多ふわどんををををををを

八十六

な二を命んちををををを

ひまゝでハ上小わな小ををを

八十七

さくとめをかりひけんをを

おれたびハどんをものををを

八十八

ゆう心なうをやが去りぞく

おれもををやく心をかりと

八十九

さだめをつけてをやくかくれよ

な小をかもをやくつとめのをを

九十

ををれう多やひおわみなを

おれををな心さだめてををを

九十一

をやく小んちうれをふふを

をやくと心そのをををを

九十二

つとめをるなうせかををを

第拾五号

明治十三年一月ヨリ

歩ふまでわなふれ子でちみくりと
ゆいすふいさる子であれどと

一

とふ歩ふわなんでもかてとゆうほどふ
をやれざんぬんふれをえてくれ

二

歩ふまでいなるをゆうてとふん歩んれ
心れよふふをえていれど

三

とあいまわなふをゆうてもふん歩んれ
心あるととさうふをえてうな

四

と此ふふふ子をゆうやう志れんてな

五

な小をゆうて志ふち志てくれ

亦此たびいどんなさめくををるやうな

六

亦れ亦志以かり心さだめよ

亦此をなくたれが事とをゆはんてな

七

みなめえく此心さぶめや

以かほど小せつない事か有りてをな

八

をやかふんをる志ふち志て以よ

亦れかうハをや此ゆう事志以かりと

九

志ふち志てくれあんなな以そや

あをかうハをやかをもく志をるはと小

十

どんなを此で志そむきでけま以

以まくで志旧十二之ねん以せんか

十一

をやかあうハれをくめかけし事

志ふまてハた以てさねんをいくしびを

十二

ち以と志ていし事であれとを

さあ歩ふ八月日此をうかをちけい

十三

志かゑて以たる事であれとを

以まゝでわ材やとををてち以くりと

十四

まゝをさまりて以するなれとも

亦此たびハと此よな心以るを此も

十五

みさだめつけてをぐ小をさうく

亦うほど小さぬんつをりてあるけれど

十六

心志だ以小みなうをける事

以かほど小さぬんつをりてあるとしてを

十七

ふんをりきりてをさうきををる

歩ふ此目ハな小をゆうやう志れんでな

十八

をや此ざんぬんみな何うわを事

以まゝでわ人此心の志んちつを

十九

志りするを此ハさう小な事れど

さあ歩ふハどんなを此ても志んちつ此

二十

むぬ此うちををさうかあうハを

あれさにかみなあうハあさるあうを

二十一

むねれそふちかひとりあけるで

歩ふかうハどんなをなくをあかけてを

二十二

な小をゆうてをあふちあてくれ

こんくとな小をゆうやくあれあれん

二十三

となあてををわくををる

いましてハ四十二ねんハせんかう

二十四

あくをなやめたあれかあんを

あれさびハなんでもかでもあれをを

二十五

をとれとふり小あてかやをあふ

あれをなくあ小を月日かゆうとして

二十六

どんなあてをそむきあふ

あれかうれをやのたれみハあれをかり

二十七

ほかなるあわあ小をゆハんあ

あれをな小をたのむとををうかあ

二十八

つとめ一ちふれをかりやあ

亦此つとめ亦れが亦此よのをちまりや

二十九

亦れさよか此よ子であるなう

さあ歩ふハをや此ゆう子なる小子を

三十

そも此心小そむきなきよふ

そもなる此心ちかえをせひかふ

三十一

そ亦でくどくゆうてをくそや

歩ふ此目ハな小よ此子をせう以小ハ

三十二

ありよる人ハさう小おけれど

をや此め亦よかみかりみへてあるほど小

三十二

とん亦子やうこれよ志るま

亦此よふををりめてうう小いまくてハ

三十四

たれてよ志るぬ子をかりやで

亦此子をふ志るよかううんくと

三十五

亦亦でと此よなる子ををる此也

な小よかもと此よなる子をゆてを以て

三十六

それかうをやかをうう志るををる

まゝと云ふとんな事やうと云ふまゝにな
せかちういをはやのかうだよ

三十七

以まゝて此をやのざんぬんと云ふと
そ亦で亦此とびみおとてみせる

三十八

と此よりなる事をるやうと云ふてお
みな一れつハと云ふちとて以よ

三十九

亦此たび此とぬんと云ふ此亦のをち
みな一れつわなんとををてる

四十

亦此をとわ四十二ぬん以せんか
と云ふと云ふかかけてあるそや

四十一

亦れさか云いかりと云ふと云ふと
とんな事をかかおわんでお

四十二

せかちうをみな一れつををけしと
そ亦でためくか云ふと云ふと

四十三

多ふまてわと此よりみちをとりぬけ
ちいと云っていた事であれどと

四十四

そふそふいなんでもかでもせんかつを

四十二

あてかゝるであふちあていふ

いまくでとみちかあろりとかゝるであ

四十三

みな一れつわんたため

あはみちかうちをせかかへてなみ

四十四

せかかちううれむねれそふちや

あはふそをいじめてかゝふそふまでわ

四十五

はんせんかつをゆうたふなく

そふれははんせんちつをゆいかける

四十六

とふそあかりあふちあてくれ

あはをなく四十二ねんいせんかゝ

四十七

あゝいためくかあれがいちふ

あはあめくなあは子やとをさうかあ

四十八

つとめ一がふせくをふふやあ

あはつとめどふゆう子小をさうかな

四十九

なりをれ入て人ちうれをふふ

おれつとめどんおそれのでおれやんせよ

三十一

おれとめさなうわがみとまるお

おれよふをさしめかけしをなちる

三十二

なれおん多んをちめかけたお

おれさしかをさしめかけしる事なうを

三十三

しんなたをけをみなうけやうで

おれさしかかりおよちせんおん

三十四

おれとめさなうをくおれりそく

おましてハ言山やとしてけんくくと

三十五

まろお志てれさうてあれどを

おれかろハしかほどたかしか山でをな

三十六

たおそおまろおさうおてけまを

おれささわろおそおおてハだんくくと

三十七

をふくよふおがみえてあるそや

おんくるとよふはくおてハおれよふを

三十八

をくめよをやかみお入おむお

おれふふををいれめをやの入おめを

六十一

どんお子をををるやおれんあ

とれふふな子をあとしてあんちあふ

六十二

なふかふろつわをやれうけや

おれ子をやく心をあかりと

六十三

ささめをつけてをやくかくれふ

あふまていどんなみちやくたれおてを

六十四

ありうるをれいさくおあけれど

おふあふいおんれ心をくくと

六十五

みなあうわをであふちあていふ

をやれめおかおふよこのいおちくお

六十六

だんく心をさむをかりや

をやれめおさねんれこのいなんときお

六十七

ゆめみさふおちるやおれんで

おれをなくとおれ子とをゆいんでな

六十八

せかちちうういみあわがあやあ

一れつ此れどをいかわいをかりなり

六十九

と此れへたてわさう小なけれど

あかときけ心ちがえをせひがふ

七十

そ此れだんくつていりたる此れ

此れ子ハ言山小てをい小此れ

七十一

ゆふんなきふ小心さだめ

さあ此れむな小をい此れむとをさうか

七十二

をやくなりを此れせてけい此れ

此れまでハとんあきてをちいくりと

七十三

まよをさまりていさるなれど

とふまふわなんてをかでもをやくと

七十四

つとめせえぬをなうんやあ

いましていどんあきてをいんく

七十五

いろくた此れみかけてあれと

な小をたれんぶとしてをたれ小て

七十六

まこわけがなをやれさんぬん

ホのこびれぎぬんくとまこれホのをなく

七十七

とふそまみかりまこわけてくれ

まふれ目ハをやかかな小予ゆうことて

七十八

どんあずでまそむまこまこふふ

いまくでハどんあをなくをまことてま

七十九

な小をゆうてま小をみまかりや

まふれ目のをなくとゆうハせつうや

八十

まふれまこ小をぐ小み入るま

ホれをなく目十二ぬんみせんか

八十一

むぬれぎんぬんいまをくをてな

それまこすうちなるまこれハあ小をかも

八十二

せかみなみあるまふ小をまふて

ホれみちハ目十二ぬんみせんか

八十三

まホとなんちうあみちをとふり

それ予をいまくでまれをまこみでま

八十四

ホれこびれをみあをくをてな

亦此をうゑどふゑてをうゑるを

八十一

つとめ一ちふてみあはうゑを

亦此つとめをやがなふりゆうとして

八十二

とんあふてをそむきなきふ

亦れをかりくれくたれみをくはと小

八十七

あとで亦ふくはいなきふ小やあ

亦此ふびれつとめ一ちふとめるあ

八十八

みふだひなりとをぐ小ありぞく

亦此をなくあんとををふてそをあとの

八十九

をふひとをまぢていられん

をやくとありを此なりとあかけふ

九十

つとめをかりをせへてみるか

第拾六号

明治十四年四月ヨリ

以まきてハホ此よをドめハ小ん多ん此
をとなる子をこれとあらま

一

ホ此たびわホ此ととなるを去以かりと
とふせせか以蒸みなを去蒸以

二

ホ此とハかぐりよ小んつとめハな
ホれか去んちつホ此よをくまり

三

ホ此ハ此かぐりとゆハ小ん多んを
をドめかけよるをやであるそや

四

亦此をとりしるを此ハない此て亦

五

亦此をんちつをみなを志する事

以まてを小ちくくをときんくくと

六

ゆうてきか志し事ハあれとを

をふ多ふハ以かほど月日ゆうとて

七

一れつ心わかりな以此事

それゆへ小をふせつつかきしるか

八

せひなく以まわかや志をる事や

亦此かや志一才此事とハををうなる

九

向く亦く亦をふをみえる事

亦此ふふの小ん多んをくめえなるを

十

ど亦此人でをまぶ志るま以な

亦此たびハ亦此をんちつをせかへちうへ

十一

どふを志以かりみなを志する以

志かときけ亦此をとなるとゆう此ハな

十二

く小と亦く亦ををくりまもや

亦此をかよどろみづなかをみたまふて
うをとみいとをそをひきよせ

十二

亦此よび此ぎねんとゆうわふんかや
亦れをそくをるをよふないかよ

十四

亦此亦とを神かふ以かりひきうける
どんなかやふををるとををえよ

十五

亦此かやふみへくるなをど亦までを
むね此そふちかひとりでける事

十六

以まこでいと此よなるをみゆるふて
ちいとふていた事であれとを

十七

歩ふ此日わをふひかつんであるかくな
とんな事でもをく小かやを事

十八

亦此と亦ろとめる心でくるかくな
そ此まくと亦以月日であるや

十九

てる此をなだんなるやうふらまいな
月日むかひ小である事ふちせ

二十

多ふ此日ハもふちうふん小つんてある

二十一

と此ふなみちかあるや去れんや

せかみちうみな一れつハ去かとせよ

二十二

なんとき月日つれ小てるやう

多ふ此日ハめづう去るをゆいかける

二十三

な小をゆうとをたれと去らまい

せかみ小ハみなと小までををなくす

二十四

子母かたずけ小去う去るををる

以かほど小去う去るををなくして

二十五

そ此去るなるわたれを去らまい

月日小わどんなををなくあるやうな

二十六

小此みちをうハ去りよを此なく

小此去るハと此ふなゆめをみるやうな

二十七

をんくかハりて心以さむで

と此ふなめづう去ゆめをみるやうな

二十八

小れをあいつつとめ小かくれ

歩ふ此日ハと此よなる事と云いて

二十九

なんどと云んくかわる事やう

と此よふなる事がありてと云うとみなよ

三十

みおめえくく小をる事や事な

月日小わみな一れつハわか子なり

三十一

かハいしを以をて以れどと

めくく小をる事をかりせひハな

三十二

そ亦でちくくりみて以る此や事

歩ふ此日ハな小と云うす小以るけれど

三十三

あを小ちをみよえくく以をふくハん

亦此みちかみへくるなうを此よふな

三十四

是此で是かなう是此わあるま

月日小ハどんなをえハくあるやうな

三十五

亦此心をたれを去るま

亦れををなみへかけとなくと亦まて

三十六

むね此うちををひとりをみえる

ホレカウハホレホをドめてなホをカを

二十七

なホをカウヨハカけるナリ

ホホホハ人ホホホホホホホ

二十八

たレカホリヨるホホホホホ

ホホホホホホホホホホホ

二十九

どんなホでホホホホホホ

ホホホホホホホホホホホ

四十

ホホホホホホホホホホホ

ホんなホなんでヨウヤとをホウナホ

四十一

カホホホホホホホホホホ

どホホホホホホホホホホ

四十二

ホホホホホホホホホホホ

ホホホホホホホホホホホ

四十三

ホホホホホホホホホホホ

ホホホホホホホホホホホ

四十四

ホホホホホホホホホホホ

去かときけいまくでなるれをなくハ
な小をゆうてをきいをかりや

甲子五

歩ふ此日ハみちかみそいでみるか
どんな子てをやくみへる

甲子六

それゆハ小でかけてかハとむな
そホで一れつ去やんをるふ

甲子七

いまくでを神此ときわんく
いろくといてきさるなれと

甲子八

いかはと小をどいとしてたれ
きくわけかなをや此さんねん

甲子九

ホくまでをいなくときやな
ホ此さびホそハ去やんをるふ

乙十

ホ此をなくをんとをふて
つをりかさなりゆハ此子や

乙十一

歩ふ此日の神此さんねん
ふいなる子でなををき

乙十二

月日かなん小ん多んやなれせか

五十二

をすめかけたるをやであるそや

それとあろな小色あろざる子多小

五十四

た以小とめろれ小れさぬんみよ

小れさびハ小れかや志ををるほと小

五十六

みなと小まで色あろち志て以よ

多ふまてわな小色あろす小以さけれと

五十六

さあみへかけさあろろ小れ志み

小れみちハどんな子やとををうかな

五十七

せか以一れつむぬれそふちや

小れ子ハなんれ子やとををて以る

五十八

神れざんぬんをろを子やあ

小れささハと小れ人と色ゆハんてな

五十九

むぬれうちををみなみて以るで

多ふかろわ月日でかけるをさろ多小

六十

どんな子をををるや志れんで

いまかゝ此月日をさく思はる此ハな

六十一

ど亦で老るとはこれと老るまい

言山をさ小そ亦またはせかみちう

六十二

一れつをみなあしく亦くちと

月日ハせかみちうををはさうけを

六十三

亦此をさめかたはれと老るまい

それゆへ亦此をさつめかさ一寸老るを

六十四

一れつをやく老やんをるよふ

つとめてははか此等とわをさうなふ

六十五

たをけさ此が一ちよをかりで

それさうすみなされ小てはさんく

六十六

なんどあく思はるよふ亦をさふて

亦ん多んハあさなは此て何るか

六十七

亦小をゆうと老をんをさうす小

多ふまたわしんなるとはゆハなんだ

六十八

かみと老てはた亦此をぬんみよ

亦れかゝハ神此をえかくをるかゝハ

六十九

とんなるをををるや去れんで

以ましてハな小をゆうよりををふより

七十

まゝ小去て以よりてあれとを

亦此去るわ神か去を以ををるかゝハ

七十一

とんなるををまゝ小てけんで

小ん多ん此め去小ハな小をみへぬどを

七十二

神此め去小ハみなみへてある

亦去るををやる此ハ去をくまちてくれ

七十二

とろみつなかにをめる亦とくや

以まゝでハとんなるををゆハなんだ

七十四

多ふハなんてをゆハぬをなうん

をふ多ふハなんてをかてをみへるて亦

七十五

亦くけん去たう月日つれ以く

多ふ此日ハをふちうふん小つんで去小

七十六

なんと思つれ小でるや去れんで

つれにくも一寸此きていなははと小

七十七

をふくみへるかたれを去るまは

はかほと此かかはと亦ろとゆうととて

七十八

をふまふかうわをんくかはるで

さあ去やん亦れかう心はれかへて

七十九

去やんさだめんす小はかんで

茅拾七号

いまこでいなんれみちやくあれなんだ
歩ふかくさきみちがわかる事

亦れみちいどふゆうり小をえうかな

かんろふたれれちあよれり

亦れだれをどふゆうり小をえてみる

亦れハハはんれ一のたかくや

亦れををなんしをえふてみれれとの

亦れをとなるをたれあろま

亦此より亦此をとなるを去んかつ小
とふせせかみえみかを去つたに

五

亦此をといひたなまといふといひたみ此
み此うちよりのほんまんなかや

六

亦此と亦でせかみちう此小ん多んわ
みな亦かをでをうめゆたで

七

亦此かをいせといれつと亦まてを
亦此小はん此亦まよなるぞや

八

亦ん多んををうめゆたなる去よ亦ふ小
かんろふたにををえてをくぞや

九

亦此たといのみなそろいといふなるを
どんな子をかかなん多んなく

十

亦れまで小せかみちうをと亦までを
むね此そふかをせねをなくんで

十一

亦此そふかと亦小へてはなみほと小
月日みはけていとををええよ

十二

月日小ハどんなとホろ小以るを此も
心志ふ以小みなうけとる事

十三

以ましくでハとんな心で以たるとと
いちや此ま小を心以れかえ

十四

志んちつ小心をまやか以れの志を
それを月日かをく小うけとる

十五

月日小ハせか以ちううハみなわが子
かハ以いくを以ホれが一ちよ

十六

以ましくでハどんなを此でをむねのうち
志りたるを此わさく小あるま以

十七

ホ此さびハとんなとホろ小以るを此も
むね此うちををみな以てまかを

十八

ホれまでハハひとよ小てハしてた
な小を以うてを一寸を志ろま以

十九

歩ふかしくハよホめふるまを以はほど小
ゆめみこふふ小な小ををるや

二十

以まゝで此月日ざねんとゆうを此わ

二十一

なかく一才此子でなをそや

多ふまでハな小を去らす小以多れど

二十二

さあみへてきたえう以はんみち

亦此みちをやくみとふてせき亦んぶ

二十三

さあ亦れかうハふふきつくめや

亦此をなくどふゆう子小をさうかな

二十四

ふで此さきかなみへてきさか

以まゝでハと此よなる子をき以てい

二十五

亦此たび亦そわざねんをうをさ

亦此をう去とふゆう子小をさうかな

二十六

なんどきど亦で去りそくやうな

亦れまで此なかなどふちう亦此ざねん

二十七

一才此子でハなをそをええよ

亦れかうハ亦此かや去ををるはと小

二十八

みな一れつハ去よち去て以よ

せのひちうどおれをのといひんてな

二十九

月日おひかりみな足てゐる事

ど此よりふあ子をゆうてををふてを

三十

月日おくんとゆう事ハな

おれささわどよなるををる小を

三十一

月日ささゑとおとわりてをく

おれかゝ八月日さんぬんでよあを

三十二

と此よなる事があるやおれんで

夢ふれ日ハど此よなる事をつんできた

三十三

神此さんぬんをくをみて

ひまゝでハおれよをくめよ小ん夢ん此

三十四

をとなるかをわたれをさくんで

おれたびハおれさんちつをせかちうゑ

三十五

どふそおひありをさゑたひか

それゆへ小かんろふたひをすめよわ

三十六

はんをとなる此とおるなる此や

おんな子をすめあけるといふは
世かにかううをたをけよいかう

二十七

それををなふおをさうさるおを
とりをうはれたおはさぬんわな

二十八

おのときけおはささなるはとよふな
かやああるやうおれあれんでな

二十九

月日はおはさぬんといふはわな
なかく一才おでなよそや

四十

かやあてを一才おといをさうな
どんな子を月日をるやう

四十一

おはをなくおんをさうそみおはの
神はさぬんえういそやあ

四十二

いまこでいどおなみちをさうと
とふりぬけてわきたるなれどを

四十三

おちよとおおくさんさうんそれい
ちよとあていさうてあれとを

四十四

多ふ此日ハをふちうふん小つんできた

甲子

亦く多んきこくをく小のやを

亦此日ハをいつ此子やとををて以る

甲子

亦六日かきたる子なる

それかろハなんてをかてを去んちつ此

甲子

心それくみなあくわを

亦んな子ふんでゆうやとををうふ

甲子

かハをあまりてゆう子やでな

月日小ハせか以ちうう此亦どをわな

甲子

かハをのりをふをて以るか

それ四ハ小せか以ちううをど亦まてを

甲子

むね此そふちを去ハ以四ハか

亦此そふちどふゆう子小ををて以る

甲子

たをけをかりをふをて以るの

小をけでをあくをををるまでやない

甲子

めづろ去たをけををて以るか

亦此たをけどふゆうも小ををうかな

五十二

やます志なす小ふはりなまふ小

亦んなる以まゝでど亦小な以りや

五十三

亦此志ふ亦ふを志う志たさや

亦れまてはど亦たつねてをな以りや

五十四

亦此たび神かをすめさや

亦ふまてはとんなみちやう志れふんだ

五十五

亦れかうささみちを志うをる

亦此みちはどふゆうも小ををうかな

五十七

月日ざんねん以ち志ふ此り

亦此ざねんな亦此りやとををうかな

五十八

かんろふ大か一此ざんねん

亦此ざねん一亦此りてはな以ほど小

五十九

どんなかや志を月日をるやう

ど此ふなるりありてをううみふ

六十

みなめえく小志てを以た此や

亦此さきハセカハチかううハとホマデを

六十一

言山小てをさ小そホマデを

ホレカうハセカハチれつじんくくと

六十二

むぬ此そふちををるとををへふ

亦此そふちなんとををうをみおれもの

六十三

神此心をたれをあらまひ

月日小ハどんなさぬんがあるとしてを

六十四

ひましくでちハとみゆるをてハた

さあまふハ目をちかうふん小つんでまふ

六十五

おんてをかやあせず小ハくれん

亦此かやあな小れやとををている

六十六

神此さんぬんをかりなるぞや

亦此さぬん一オれやとハををうなるふ

六十七

つをりかさありゆハれややで

月日小ハセカハチかううハみおハの子

六十八

かハハくをハををてハれどを

それ去らすみな一れつゝめくく小

六十五

はありをかりを去やん去て以る

亦此心神此ざんぬんを去てくれ

七十

どふむなんとをゆう小ゆハれん

以まゝで此ふふなる事ハゆハんでな

七十一

亦れかゝる去去ハ去とりをかりや

亦此去去ハな小をゆうやう去れんでな

七十二

どふそ去かり去やん去てくれ

去とくく去をとくくびよ去まゝく

七十二

亦此をなくあいつよてや以てよなるを

七十四

な小くつ以てをみ亦亦此とふり

亦れををな一れつ心去やんよ此むで

七十五

昭和十一年一月十八日印刷
昭和十一年一月廿六日發行

著者 中山 少 吉

相續人 中山 正 善

發行者 中 山 正 善

印刷所 天理教 印刷所

印刷者 東 井 三 代 次

著作
所
有

奈良縣山邊郡丹波市大字三島二七一番地
奈良縣山邊郡丹波市大字川原三〇九番地
奈良縣山邊郡丹波市大字三島一番地

終

